
イリスの瞳

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イリスの瞳

【Nコード】

N6873V

【作者名】

葵

【あらすじ】

その宇宙は、“星の人”と呼ばれる一族に侵略を受けていた。その力はあらゆる生命体を蹂躪し、隷属させていく。やがて彼らは2つの勢力に別れ、宇宙にいる全ての生命体を巻き込み、争いを続けていた。

そんななか、一人の少女がある兵器を起動させることでその流れは変わる。そして一人の裏切り者との出会いにより、あらゆる者が新たな動きが見せ始める。

あらゆる生命体を巻き込んだ、その宇宙の破壊の時代が変わろう

と
し
て
い
た。
。

プロローグ―始まりの空―（前書き）

SFとありますが、どちらかというとファンタジー寄りな部分もあるかもしれません。

もうひとつと比べてハードになると思いますが、激しくなってきたら残酷な描写ありタグを入れると思います。

ブローグの始まりの空

穏やかな、空であった。

青色だけが澄み渡る空は、
見ているだけで吸い込まれそうで、
ずっと見ていたくなる。

誰の嘆きも聞こえない。
気が滅入るような争いもない。
とても、とても静かだった。

自分が、その下に居ることが分かる。
少しして、何か言葉を紡ぐ。
内容は、分からない。

まだ、知らないことだから。

隣にいる人が、それに返事をする。
何かに座って、同じように空を見ている。

同じように、その内容は聞こえない。
それが自分にとって嬉しいことなのか、
悲しいことなのか、
分からない。

だが、胸のうちには何かとてつもない何かが溢れそうになっているのは、分かる。

それを抑えながら、再び空を見る。

ずっと求め続けてきた、輝くような空を。

序章くせかいく

とある、宇宙での話である。

暗黒の空間が広がり、天体はそのなかで各々燃えている。
途方もない宇宙の、一角での出来事であった。

とある銀河に、液体型生命体が生息していた。

彼らの生まれた惑星以外の天体には知的生命体はおらず、膨大な資源のみが存在していた。

彼らはかつて、一つの海であったが、あるとき突然分離を開始、流れるように進化を遂げる。時折空から落ちてくるものを参考に、彼らは自分たちが活動をするための乗り物を作り上げ、文化をも創生した。

彼らに名前はない。

それで存在を縛る必要もなかった。

彼らは彼らであり、個人の意識は存在したが、それすら彼らであった。

自身が彼らにとっての世界の全てであり、必要に駆られることもなかった。

天体の資源を取りつくした彼らは、そのまま外の宇宙へと旅立つことにした。元の母星には僅かな住民は残ったが、大多数は外の世界へ旅立つことを選択した。

その気になれば一つの海に戻ることもでき、液体状である彼らの生命力は極めて強い。

彼らが共に過ごす居住スペースと、敵性生命体から守るための兵器を積み、液体型生命体は出発をした。

宇宙の一角、暗黒の空間で、光が瞬いた。

巨大な戦艦の周囲ではいくつもの爆発が起こり、球状の液体が辺りに飛散する。

悲鳴すら聞こえない、死んだような静寂を覆うその暗黒の空間で、それは悲鳴を思わせた。

だが、それすらも瞬く光によって消散していく。

狙われたわけではない。

戦艦への攻撃に巻き込まれているのだ。

戦艦は、丸い機体を持ち、そこから手足が生えたような形状をしている。

だが、1番目をひくのは背中に取り付けられた肥大したかの如くの巨大なドーム状の物体であった。

そこには水、という物体によく似た液状のものがたたえられている。それは爆発が起こるたび、逃げ惑うかのような移動を繰り返した。

それを避けるように直撃する光、それは雷であった。

真空の海で発生する雷、それは戦艦に比べればあまりにも矮小な一つの物体から発射されている。

それは宇宙で最も広く生息しているとされる“ヒト”によく似ていた。

だが、その体には覆い隠すように機械が取り付けられている。

そこから戦闘機と同じようにブースターが開き、暗黒の空間を自由に移動することを可能にしていた。

闇が広がるなかで、極めて目立つ白銀の装甲は、戦艦を守る戦闘機の射撃を掻い潜り、それらを乱暴に沈めていく。

その機械で覆われた手から、雷が煌いた。

一撃は重く、そして激しい。

液体生命体の技術の粋を集めたとされた戦闘機を、掠っただけで破壊していく。

その機体の口元が、何かを口ずさむかのように動いた。

それは真空中では聞えない。

だが、その瞬間機体の周囲を帯状の光が覆う。

そこから、槍の如く鋭利な形状をした雷が一斉に発射される。

あるものは貫かれ、あるものは絡め取られ、戦闘機は爆散する。

その静寂の惨劇の片隅で、彼は茫然とそれを眺めていた。

液体生命体の戦艦はひとつではない。

ここよりも遅れること何光年。

そのもうひとつの戦艦から救援に来た部隊の一機であった。

敵襲、と聞いて彼は状況把握のために突出してこちらへやってきた。

既に戦闘は始まっている。

だが、彼はそれに対してどうすることにできなかった。

敵は一人である。

小さな“ヒト”のような兵器が、戦艦の周囲を飛び回っている。ただ、それだけなのに、彼らは蹂躪されている。

使うはずもないであろうものだった戦艦に搭載された兵器を総動員している。

だが、小さい標的に当たるはずもない。
それどころか、いたぶるように順に潰されてしまっている。

あれが、何なのか。

一介の兵卒でしかない彼には想像すらできない。
戦艦にいる知識学者でも分かることができるのであろうか。

彼にできることは、帰って報告をすることである。

そして、彼のみの権限でできることではないが、取るべき最善は同胞を助けることではない。それは思考、というよりも原始的な本能で感じていることであつた。

あれは逃げなければならない。

宇宙という広い世界で、あれから見つからない場所を探さねばならないのだ。

たった一機の敵に、彼はそこまで思考を働かせると、戦闘機の操縦桿にあたる部分进行操作する。

だが、震動と共に戦闘機の駆動は止まり、彼は宇宙に投げ出される。

操縦席、彼が満たされたポッドが射出されたのだ。

だが、戦闘機の爆発を横目に、ポッドは慣性に身を任せることなくそこで静止している。

透明な材質でできたポッドから彼は、すぐ傍にいた存在を認識することができた。

『 ああ、やっぱりこういう姿の生物なのか 』

ポッドにある通信装置に、その声は直接流れ込んできた。
彼は信じられなかった。

この通信は仲間同士でないと通じないようなものだ。

外からの通信が流れ込んでくることなど、信じられない。

『 聞えるか？見えるか？…初めて見るからよく分からないな 』

『 おい、遊んでいる場合か 』

彼のいるポッドを掴む、輝くような黄の機体に身を包むその姿は、
外見からして戦艦を蹂躪するあの白銀と同類の生命体であった。そ
の近くには、同じような姿をした、橙の装甲を身につけた存在がい
る。頭に当たる部分は保護のためか隠されており、捻じ曲がるよう
に笑う口という部分しか窺えなかった。

『 遊んでいる？こういうのを研究するのは俺の役目なのでね 』

『 それにしても、だ。今は閣下が戦っておられるだろうが 』

『 それももう終わるでしょ。 おーい、聞えるか。何か反応
しろよ 』

何だ、これは。

彼が身じろぎすると、目の前の黄色は満足そうに頷く。

『 おお、やっぱり生き物なのか。いやはや、宇宙って広いなあ。
お？ 』

強い光が辺りを覆う。

彼はポッドの中で、その光景を見た。

白銀の機体の手から、一際大きなエネルギーが放たれる。
それは流星如く宇宙の闇を駆け、戦艦へと直撃する。

ポッドを避けるように、それは戦艦を真つ直ぐに貫き、衝撃が辺りを覆った。

『お前らも運が無かったなあ』

音のない爆発に、彼が茫然としてみると、黄色の機体が彼を覗き込む。

その黒い部分で覆われた視覚器官が、そこではっきりと見えた。

『よりにもよって、閣下の視察コースに突っ込んでくるとは。おかげで俺の仕事が増えることになったじゃないか』

『これは全員の役目だ、ヴェンデル。まずは他に仲間がいないかを聞き出さなければ』

彼はその言葉に自分の体が凍りつくような気がした。あの光景が繰り返される。

しかももうひとつの戦艦には彼の情報を受け継いだ存在がいくつもある。

彼という存在にとっては何よりも重要な存在であった。

『それに関しては任せてくださいよ。何をしたら死ぬか、何をしたら苦しむのか。それを研究するが俺の仕事ですから。何を知っているかなんて知るのは至極簡単だ』

彼は理解をしまっていた。

こいつらが何をしようとしているのかを。

そして、何を目的にしようとしているのかを。

彼がどうなるか、それは考えられなかった。

ただ、この事態をどうやって解決するかを考えていた。

だが、それを阻止するように、黄色の機体が笑う。
あざ笑う。

『そうだな、お前はその第一号だ。お前らという生命体がどういう生き物なのか。それを徹底的に調べつくす。死にはしないさ、安心しろ。他にも使うつつもりだが…そうだ』

黒いカバーに覆われたその視覚器官が、歪むのが見えた。
もはや、自分の認識機関がおかしいのかも分かることができない。

『ケース1、とんでもない絶望を味わった個体ってのは、どうだ？』

とある宇宙の、とある一角。

一つの生命体の終わりとある種の始まりであった。

第1章『始動〜はじまり〜(1)』

透明なガラスの向こうで、何かが輝いた気がした。

途方もなく広がる宇宙。

黒い空間には、多くの星が不気味に蠢いているように見える。

見ていると、吸い込まれそうだ。

一人で放り出されるときを考えてしまい、身震いをする。

今現在、イリスの居る宇宙船は静かに駆動音を鳴らしながら順調に航行しているはずである。

それはただの杞憂であるはずだ。

「何してんだ、イリス」

一人で思考していたイリスの背後から声をかけてきたのは、船を任された隊長であった。親子ほど年の離れているイリスに、よく気をかけてくれる。

よく鍛えられたその体は、今はイリスと同じく白い防護服を着ているためいつもよりも大きく見えた。

「サボリ、なわけないか。面白いものでも見えたか？」

「、そういうわけではないです。ただ、つい見てしまうというか」

船内の通路は、小さな窓がいくつか設置されている。

白色をした無機質な船内から、外の闇に目を奪われるのも仕方のないことかもしれない。

「作業の方はどうだ？」

イリスは、この船に積み残されている器具の管理を任されている人間であった。

というか、船に乗っている人員のなかでも若いイリスはそれしか出番がない。

物覚えのいいことが取り得である彼女にとってはやりやすい仕事であつたが。

「全部をざっと見て見ましたが、特に問題はありません。今は細かい作業の途中です」

機具、というのはこの船の目的そのものに必要なものである。

何度も点検を繰り返されたものであるが、ネジの一本でも緩んでいると作業に支障が出る。

そのためイリスは同じ作業の繰り返しながら、気を緩めることができない。

隊長はそれを聞き終えると、何かを思い出したようだった。

「おお、そういえばそろそろ見えるぞ。こっち来い」

「、いや、別に珍しいものじゃ……」

「まあ見て見ろって」

聞いただけで何かを理解したイリスに構わず、隊長は自分の背後の方を指す。無理強いをされている雰囲気でもなかったが、イリスは黙ってついていくことにする。

案内されたのは、宇宙船の操縦室だった。

ドアが開き、イリスが入っていくと、何人かが航行作業を行っているとあるところである。入ってきた隊長とイリスに対し挨拶をするすぐに自分の作業へと戻った。

それほど大きくないこの船の操縦に必要な人数は多くない。操縦者と、船全体の管理を行うもの。

そして、周囲を見張るセンサーを操作しているものが複数名といっ

たところである。

後は仮眠をしている人員を含め、10数人というのが船に居る人員の全てであった。

慌しく乗り込んだイリスはまだ全員を紹介されておらず、情けないことに名前の方も定かではない。一応目的地に着いたら切り出そうと考えている。

「ほら、あれが目的地だ」

隊長が指した先は、透明な障壁の向こう側。船の向かう先であった。

暗い闇のなかに、綺麗な球体が浮かんでいる。しかしその表面は赤茶けた大地と、薄暗い雲が浮かんでいる。

「これからあそこに降りるんだ。なんだか信じられねえけどな」

「隊長はこういった作業は？」

「何度でもあるさ。それでもってことだ」

これからイリスたちの部隊はあそこで資源採掘を行うことになる。
ている。

イリスが管理している機具というのも、地面や岩を掘るための重機であったり、地質調査のための器具などである。

既に惑星には駐留している部隊があり、イリスたちの船と交代する予定である。

「まだ何かありますかね？」

「分かんねえよ。でも仕事があるだけマシさ」

センサーを操作する役目の若い男がぼやいている。それに対し返事

をしたのは、中央の操縦席に座る老人に近い年齢の男であった。口調は荒っぽいが気性はそうでもなく、頼りにされている人間である。

「一応は働いているってことにできるだろ？それに結果だって出せる。」奴ら”はこんな仕事はしないからな」

「しないからじゃなくできないんじゃないのか？」

若い男はふざけたような調子で言う。しかしそれは真実を含んでい
るような響きがあった。

「なにせ破壊しか知らない一族だ。手に持った先から壊しちまうの
さ。何もかもな」

「よせ、滅多なことを言うな」
隊長がとがめる。

「仮に本人がいなくても、そういう態度は表にでるもんだ。そ
うのを味方に見せるもんでもないだろう」

「味方ね、確かに」

若い男は、一応は納得したそぶりを見せる。だが、それでもいい
りないような空気であった。

「でも納得がいかないこともある、」

「まあ落ち着け。目の前のことに集中をしろ」

他の人員がなんとか諫め、その場では落ち着いたようになった。

イリスはなんとなく入り込めなくて手持ちぶさたである。

そんなイリスに気づいたのか、隊長はその肩をたたく。

「気にするな、口ではああだが、やることはちゃんとやる。お前も
準備をしておけ」

イリスはその言葉に従い、入り込めない場所を後にした。

イリスがこの部隊に入ったのはつい最近だ。彼女は部隊を定着していない。たらい回しの状態なのだ。上のほうの考えはよく分らないが、あまり考えていないのかもしれない。木っ端の兵士のことなど、大局には関係がないと思っっているのだろう。それには同意をする。だが、納得もいかない。

彼女は同じ場所に戻り、つい宇宙の闇を眺める。変わらず星が煌めく宇宙。遠くにいくつか同じ型の船が飛んでいる以外は、何もないうように見える。

彼女は最初こんな世界があることは知らなかった。故郷の惑星でも田舎に引きこもっていたようなものだ。それで不便もなかった。

知らないことを思い出し、首を振る。
まずは、目の前のことだ。

この部隊、組織に参加したのは、何か変わるかもしれないという思いからである。それが、辺境の惑星の実になるかも分からない調査であつたとしても。

その一步を踏み出した、瞬間であつた。

闇を光が煌めいた。

そして、爆炎が宇宙に起こる。

それはとても小さなものであった。まるで、何か一個の物が破裂したかのような。音のない空間の爆発は、夢を見ているかのような。

だが、同時に船内をアラームが鳴り響く。
その意味は、知っていた。

「何があつた!？」

操縦室へ駆け込むと、隊長の鬼気迫る怒鳴り声が懐へ飛び込みように響き渡る。

操縦室の中は一転して殺気立っていた。

前方には降り立つ予定の惑星が目の前に迫る。
何も変わりはない。

だが、その前を横切るように光が通ったのを見逃すことはできなかった。

同時に横から殴りつけられたかのような爆発と震動が内部を襲う。

何かが爆発したということは分かった。

「左部エンジンが損傷!機能しません!！」

管理士の男がその状況を報告する。

「熱源を感知!すごい速度です!！」

「なぜ分からなかった!？」

「範囲外からの攻撃です!！そしてこの速度だと、この船の機器で

は探知しきれません!!」
「くそ！」

攻撃、されている？
敵が、来た？

イリスは現実味がない現実を目の当たりにし、思考が停止する。しかしそれを揺さぶるように次の震動がおそう。

「惑星の大気圏内に入りました!!」
「最大限に舵を振れ、惑星に紛れ込むんだ、それしかない!!」

イリスはなんとか近くの機材にしがみつく。
悲鳴を出さないようにするのが精一杯だ。

隊長が床に伏せながら、必死に指示をとばしている。

イリスには何ができるだろうか？
こうして悲鳴をあげないことが最善なのか？

今まで覚悟していたはずであった。しかし、ここに来て体が言うことを聞かない。

「イリス、お前は、」

隊長に名前を呼ばれ、はつとする。
その振り向いた顔は、決死の表情だ。

何とか、返事をする。したような気がした。

だが、その返事はそれ以上の声に遮られることになる。

「ああ、隊長!!」

イリスの視線は吸い込まれるように前方を見る。

前方にあるのは、宇宙船の進路であつた。

そこには惑星の大地が広がっている。

宇宙船は、その空にいるのだ。

その目の前に、何かがあるのが見えた。

それは手足のような4つに分かれたパーツを持っている、そう、それは

「”星の人”だ!!!」

耳をつんざくような悲鳴は、確かにそんな言葉だった。

(2)

イリスの目が最初にとらえたのは、とんでもなく澄んだ青い空であつた。

視界いっぱい、広がる青。

自分が、そこに溶けてしまったかのような感覚に陥る。

痛む胸に、息を吸い込もうとした瞬間、彼女は飛び起きた。

あたりを見回すと、そこは一面の砂が広がっていた。
乾ききったその空気に、思わずむせる。

立ち上がって辺りを見回すと、砂はどこまでも広がっている。だが、彼女の背後に広がるのは鬱蒼と茂る森であつた。

どうやらここは砂漠の境界らしい。
自分は、どうなったのだろうか？

記憶は宇宙船の中で終わっている。

一体何がどうなったのか、さっぱり分からない。

「！隊長！！隊長、みんな！！」

隊長と、まだ名前も知らなかった仲間を呼ぶ。
だが、辺りには耳が痛くなる静寂しかない。

その静寂の中に、何かが聞こえる。

金属のような音、そして、地面に響く重い音だ。

「え？」

イリスは思わず声をあげた。

その視線が囚われたのは、砂漠の向こうに徐々に立ちこめる黒煙であつた。

最初はあるものはなかった。

何かがあの下にあるのか？

「船、なのかな？」

こんな砂漠で、昼間にたき火もないだろう。

音といい、火だけならあの煙は大きすぎる気がする。
行ってみる価値はあるかもしれない。

船だとしたら、イリスだけここに放り出されてしまったのかもしれない。柔らかい砂の上に転がったらしく、辺りにはそれらしい軌跡も残されている。

体を確かめて、擦り傷以外の外傷がないことを確かめる。宇宙での活動のために着込んだ防護服のおかげだろうか。それにしても奇跡だと自分でも思う。

・・・ほかの仲間の無事は後で考えよう。

誰か一人でも生きていたら、それでいい。

船に行けば助けだって呼べる。

そう考えて、イリスはそこに走ろうとする。

だが、それを黒煙の元から起こった爆発が阻止した。

遅れてくる重い音に、イリスは思わず立ち止まる。吹きあがる黒煙とともに、何かがぱらぱらと辺りに落ちていく。

何かが爆発したことは確かであるらしい。

風は、こちら側に吹いている。

いくつか軽い破片が、イリスの足下に転がってくる。

そして、キラキラしたものが空に広がっていく。

それは、イリスの足元にも落ちてきた。

何かの、金属らしい欠片。

その色は、とても見覚えのあるものだった。

黒煙の近くに、何かがあるのが見えた。

空中に、いくつかの何かが浮かんでいる。

それは、風に吹かれた破片ではなく、きちんとした動きを持っている。

そののひとつが、光で反射する。

その瞬間、彼女は森に向かって走り出した。

きん、という高い音がする。そして、彼女の横の砂がはじけ、熱い砂が頬を焼いた。

見つかった。

彼女は本能、いや記憶の部分でそれを察知した。

（、思い出した！！全部！！！！）

悲鳴を押さえながら、彼女は走る。

最後に見えた、あの光景。

宇宙船の外に見たもの、それは金属だ。

その正体は、とつくの昔に知っているはずなのに、なのにこの動揺は、一体なんなんだろうか。
忘れたかった？ いや、違う。

金属音が背後まで迫った、次の瞬間、彼女は木々のなかに飛び込んだ。

確かに聞える舌打ちとともに、金属音が遠ざかる。

空を覆うほどの木々のなかに、あの物体は入れない。

彼女はそこで一端止まり、防護服を脱ぎ捨てる。

なかに着ているのは薄いインナーではあるが、船内の作業もできる服だ。足まで覆いかくしており、走ることも問題はない。

彼女は再び走り出す。

同時に、横にあった木が熱を帯びた。

燃えるような音とともに、悲鳴のような音を上げながら、木は溶ける。

本当に、溶けている。

何かの液体が浴びせられ、そこから溶解を始めているのだ。

そして、生きた物が焼ける耐えられない匂いが、イリスをせきたてた。

それを皮切りに、イリスの前後左右の木が同じ攻撃を受け、次々に倒れていく。

イリスはそれをよけながら、なんとか走り続ける。

このままあきらめてくれればいい。

そう願った。

考えのまとまらないまま、イリスは森を抜けた。
抜けようとした。

その瞬間、彼女は背中から吹き飛ばされた。

地面にもんどりうち、痛みに悶える。

何とか、確認すると、森が、消えていた。

業火に包まれ、燃え尽きようとしていた。

まるで時間を飛ばしたように、燃え尽きている。

自分は、あれに巻き込まれる瞬間だったのか？

「なかなか賢かったな」

その思考を、止める存在がいた。

「だが、まだまだだ。我々にお前たちが追いつくことなど、何千年経たとうがありえないだろうがな」

上空からの無粋な声とともに、

金属の固まりが降りてきた。

体があり、手があり、足がある。そして、頭。その部分には、傲岸不遜な男の顔がのぞいている。その全てに、砂漠と同じような茶色をした鉄の装甲が覆っている。その手には、牙のような爪状のパーツが装着され、まるで異形を思わせる。そしてそれが、イリスの

記憶をいやでも蘇らせた。

「あな、たは・・・」

「ほう、私を知っているのか？」

外見は、20代後半といったところだろうか。

だが、それが真実の姿でないことはこの宇宙のほとんどの生命体が知っていることだろう。

「無理もない、私の名はこの宇宙の全ての愚民に届いているのだからな。たまには辺境の惑星に赴いてみるものだ。こうしたなかなかできない経験もできる」

ずいぶん多弁なタイプらしい。

そして、だいぶんおかしい性質を持つようだ。

「それもこれも我が主のおかげである。あの方こそ我らを率いてたつお方だ。やはり何よりも大事なのは武勇、」

「私、貴方を知ってる、わ」

このままイリスが干からびるまで喋りたおしそうな男を思わず止めるように声をあげてしまう。

だが、男は特に気分を害した様子もなく、イリスを見た。

「ほう、やはりか。こんな小娘にも私の名が」

「知っている、けど、ね」

さつきと矛盾したことをさりとってのけよつとした言葉を再び止める。

「貴方は、星の人で、レイ・シエルね？」

男の表情が変わる。

イリスは何も動揺しなかった。

「それは真実だ。・・・だが、その名前はただけでない。それは奴らがいるせいでつけた名前なのだからな」

星の人。

それは現在の宇宙に広く生息している種族の名前だ。外見は、人によく似ている。しかし、彼らは老いることはない。全てが、20代後半の外見で止まる。全員が、まだ成長途中の若者のようなをした、奇妙な人種だ。ちょうど、目の前の男のように。

「当然、お前はその奴らの末端の末端の塵芥だ」
「よくご存じで」

返す言葉もない。それは真実だ。

星の人は一枚岩ではない。

現在はレイ・シエルとソル・ファインという2勢に分かれ争いを続けている。

レイ・シエルは星の人だけで構成されている。

ソル・ファインは悪く言えば有象無象。末端では様々な種族が所属している。ただ、一つの目的のために。イリスが所属しているのは、間違いなくそちらである。

「船、を攻撃したのはあなたね」

「いかにも！私はどのようなときにも手加減はしない。後始末に關してもな！！」

鋭利な爪がこちらに向けられる。

体が硬直をするが、構わず続ける。

「それにしてもどうして貴方のような方がここに？」

「決まっている、私はあの方の命令が全てだ！宇宙だろうとブラックホールの内部であろうと私はいかな場所にも赴くのだ！」

（頭がぬるいタイプなのかしら・・・）

これは種族関係なく、性格だろう。

とにかく自分を誇示したくてたまらない、ソル・ファインだろうが故郷だろうがこの手の人間は存在する。

イリスは冷静な部分をフルに動かし、再び話を戻す。

「ど、どうしてこんなところで、わざわざ小さな船なんかを？」

「命令だからだ。ほかにあるまい？理由があろうとも塵に話す趣味はないがな！！」

もしかして話した先から忘れているのか？それとも自覚がないだけなのか？

イリスは耐えられずに混乱をする。

だが、それを見逃さないように男の目が一瞬鋭く光った。

「どんな木っ端だろうと、私は手を休めないぞ。ここから逃げてももう無駄だ。この星にいる羽虫は全て駆逐した。今もな」

再びきた重い音。

彼女は背後を振り向く。

崖となったその場所は、比較的高い位置にあった。

そのおかげで、広い惑星の大地を見渡すことができた。

同じように、黒煙が上がり、光るものがいくつも飛行してる光景を。

何かが胸からはいあがってきた。

だが、吐き出すことも、できない。

「お前は最後の一人だ。これでこの星の仕事は終わる。だが、その前に、だ」

男が、呆然としているイリスに揚々と話しかける。返事などは気

にしていない。遮ぎるものがない限り。

「お前はあの方への手みやげにしようと思う。丁度ご趣味で使われる体を切らしたらしくてな。まったくあの方にも困ったもの、」

イリスは手の中のものを目一杯力を入れて男に投げつけた。

拳大の石が、男の装甲に当たる音がする。

それを背中確かめながら、彼女は背後に走る。

男の怒号を背に受け、彼女は崖から飛び降りた。

赤い光が、彼女の周囲を貫く。落ちる瞬間、それが肩を掠め、痛み
に顔をしかめる。だが、それに悲鳴をあげる間もなく、彼女は真下
へ落下をし、崖の下に広がる湖のなかへ飛沫とともに吸い込まれた。

彼女の体はそのまま湖に転落する。
準備はしていたが、水の中にたたき落とされ、若干の水が鼻に入ってくる。

赤い色が、目の前に広がる。

周囲を光線が挟り、視界を砂煙が包んでいく。
進むしかない。

だが、水にさらされている肩は想像以上に痛む。
ここから逃げたとしても、この出血を何とかしないとイケない。

彼女は進もうとする。

だが、体が攻撃の衝撃にぶれてなかなか進むことができない。

泣きたくなる。

だが、息を止めていなければ攻撃以前に死んでしまう。

ここからでたところでどうなるだろうか？

あの光景を思い出す。

船の一つでも残っていれば、連絡ができるかもしれない。
だが、それまでに生きていられるだろうか？
こんな何もできない小娘が、一人で何ができる？

いや、自分は何かをしようとして、組織に入った。
ソル・ファインに入ったはずである。
なのに、現実是这样だ。

敵の一人も倒せない。

当然だろう。

こんな子供一人が組織には言ったところで、敵が死ぬわけではない。
なら、ここで死んでも問題はないだろう？

（嫌だ！！）

当然心が受け付けるわけがない。

諦めたくない。

だが、現実には常に残酷だ。

それを知っているはずなのに、自分は。

背後から襲う衝撃に、水中にも関わらず底にたたきつけられる。
息も続かなくなってきた。
そのせいか、思考も止まる。

（嫌だ、嫌だ、）

誰かが助けてくれる、なんて期待はしていない。
なのに、子供のように何かに縋ろうとしている。
どうせ、死んだところで何も変わらない命。

だけど、イリスにとっては、自分の命だ。

（せめて、何かがしたかった）

朦朧としてくる意識で、彼女は回顧する。
だが、もう遅い。

イリスの体が、重く沈んでいく。
手につかむのは、柔らかい泥ばかり、

「将官殿!!」

背後から声をかけられ、男は我に返る。

気づけば、自軍の戦闘機がいくつかこちらを伺うように浮上している。しばらくしてそれが自分が命令を下した部下たちだということに気づいた。

戦闘機、とは言ってもそれは鎧をまとった男よりも少し大きいだけである。

位が低い、そして力が発達していない雑兵が乗るものである。だが、その力は侵略するどの星のそれよりも高いものであった。

「この星は全て破壊いたしました。どうなされたのですか？」

男の思考はようやく冷静になる。

追いつめたはずの矮小な塵に、とんでもない無礼を働かれたのだ。それで頭が灼熱に染まり、今に至るらしい。なんとも恥ずかしいことをしていたものだ。

「いや、取りこぼしを見つけたのでな。全力をもって、破壊に当たっていたことだ」

「でしたら、もうこの星は」

「そうだ、これから報告に戻るだけになる」

部下の前でそんな失態を明かすわけにもいかず、何とか取り繕う。後の始末は部下に任せればいい。自分がやるべきことはやった。

後はあの将軍に・・・。

「なら、行くぞ」

男は爪状のパーツがはえそろった手から再び光を発射する。とどめのつもりであった。もつとも、追っていた相手は浮かびあがることもできないほどに粉々になっているだろうが。

力が入ってしまったのか、派手に飛沫があがった。だがそれで男は終わった、と意識を確認することができた。

はずだった。

瞬きほどの間の後、男の身体を衝撃が襲う。

それは、まどつていた鋼鉄を一部決るほどの威力だった。呼吸が止まる。

痛みとともに、男の思考が再び怒りに染まろうとした。

だが、それは息とともに飲み込まれる。

派手にあがった飛沫が収まるとともに、周囲には霧のように水分がしばらく漂っている。

その間に、佇むようにそれは居た。

視線を奪われるのは、鮮やかな紅。

細身の身体を手足から包み込むように、赤い鋼の鎧が輝いている。腕には頼りない細い腕を覆い隠すように、鋼鉄のパーツが装着され、手の平の発生装置が光る5本の指がある。足は腰から鋼に覆い隠され、背中には尖った形状の発生装置が束になり、翼を思わせる形状をしていた。

男はそこまで一瞬でそこまで観察ができたのは、知っているからだ。

それも、ずっと昔から。

そして、今、自分が使っているものと、同じ。

「おまえ、は！」

つい声が出たのは、咎めようとしたからだ。
それを、仲間だと思ったから。

それを使っているのが、同類でしかありえないから。

「お前は、誰、だ！！」

紅の鋼を身にまとった、本人が目を開いた。

そこでようやく彼は顔を確認する。

鮮やかな、翡翠色の瞳。

だが、その視線はどこか一定ではない。

ぼんやりとした光を放っているかのようなそれに、男は思わずたじろいだ。

部下が通信で指示を仰いでいるのにもかまわず、男は相手と対峙する。

相手は何も言わなかった。

だが、男は徐々に記憶からそのことを思い出していた。

「お前は、もしかや先ほどの塵芥か？」

唯一覚えていた目の色。

それは翡翠だった。

恐怖に染まって、だが何かを諦めていないあの腹の立つ目だ。それと同時に、男の対処が決まった。

「どういづつもりかは、分からないが、とにかくだ」

話を聞かなければならないことは分かっている。

殺すにしても、何にしても、やるべきことはまず一つ。

「それを渡してもらおうか！」

男の手から、再び光が発射された。

それは相手を破壊するだけではなく、死ぬことを免れた相手も溶解することによって命を奪う。

そのはずであった。

「
」

何かの言葉が聞こえた瞬間、男の身体は地面に叩きつけられていた。

先ほどと、同じ。

攻撃したと思った瞬間、彼の身体に衝撃を襲っている。

「が、！？」

すぐさま体制を、と思ったが身体が動かない。

見ると、今度は手足も、胴体も、粉々とまでは行かないが、確実なダメージを負っていることが分かる。

同時に、嫌な匂いが鼻をついた。

指先を見る。

それは、僅かではあるが、溶け始めていた。
見覚えのある光景だ。

彼自身ではなく、対峙してきた相手の。

（反射か！？）

歴戦の戦士である彼の思考は素早かった。

彼は、彼の攻撃をそのまま受けたのだ。

彼の近くに、何かが続けて落下する。

部下たちの戦闘機だ。

同じように彼の攻撃の余波を受けたらしく、飛行が不可能になるほ

どの損傷を受けているらしい。

彼は起きあがれないまま、上空を見る。

相手が、こちらを見下ろしていた。

何をするわけでもない。

それほどパーツのついていない腕を、おろしたまま。
ただ、翡翠の色をした目だけが光る。

「……なんだ、これは……」

何かを、しゃべった。

彼は身構える。

だが、それだけだった。

背後のブースターが静かに起動する音がすると、それは彼の見上げる遙か彼方へと飛び去っていった。

第2章『飛翔〜であい〜(1)』

彼女の意識、はようやく目を覚ました。

そのときは、もう惑星の大地が遙か下に遠ざかっているところであった。

「へ？」

彼女がそんな声を出すと同時に、動きは止まる。

それによって落下をすることもなく、彼女は静止した。
しばらく考える。

まずは、この状況。

だいぶん高いところまで来たらしい。

そこは、夜と青の間。

夜？

光る星が、やけに近くにあるように思えた。

そして、強い光が目を焼いた。

やけに大きくなってしまったように感じる手を翳し、彼女はそれを確かめる。

それは、大きな光であった。
いつもどの星でも見上げる存在。

それが、今同じような目線の場所に存在している。
あれが、どうやらこの星の太陽、

そこに来て、彼女は自分の身体を確認する。

腕、はやけに堅い。そしてやけに大きい、ちゃんと動いた。
身体はどこも痛くはない。だが、妙に堅い服を着ているような気がする。

足に一番違和感があった。見ると、腰から下は完全に鋼鉄に覆われて、いる。

（鋼鉄？）

光に照らされ、彼女はようやく確認する。

鉄の指、赤い鋼を身に纏う身体、下半身に装着されたブースター
のような鋼鉄。

そのどれもが、説明がつくものではなかった。

「ええええええええええ！？」

空と、宇宙の狭間のような場所で、彼女は絶叫した。それは直接自分の耳に入ってくるような感じがする。

慌てて自分の耳に鉄の指で触れる。

同じように硬質な物に触れる感触。

どうやら、耳と後頭部を覆うように赤い鉄のパーツが装着されているようだ。そこから自分の声を認識しているらしい。落ち着いてから、ゆっくりと全身を確かめる。

外見は鋼鉄の鎧に覆われている。

だが、その中身、自身の身体はきちんと存在しているようだった。

とにかく、こんな中途半端な場所から移動しなければならない。

惑星に戻ったほうがいいわけがなかった。

あの惨状と、あの男たちがまだ存在しているはずだ。

なら味方の船がいるかもしれない宇宙に居たほうがいい。

選択の正しさはともかく、冷静さを少し取り戻した彼女は一人で頷いた。

彼女の記憶は、水の中からあやふやなものになっている。移動の

さなか、思いだそうとするが、まるで靄がかかったかのように事態を把握することができない。

水の中から、場面は飛び、身体が宙に浮いた。

次は男たちが吹き飛ばされる場面に飛ぶ。

そして、動くがままに任せ、ここに来ていた。

もちろん何があったのかはさっぱり分らない。

だが自分の今の状態が尋常でないものであるということとは分かった。

（何かの、兵器の一種なのかしら？）

彼女自身、奇跡が起こったなどという戯れ言などは信じない。湖の底で歩いていたのが一番古い記憶だ。自分に何が起こったのだろうか。

それにしても、今の格好を何か見覚えがあるような気がしないでもなかった。つい最近見たような。

それを指摘してくれる貴重な存在もないまま、彼女の身体は宇宙へののりだし、小惑星を蹴りながら移動する。そして、大きめの岩に貼り付くように止まると、息を吐き出した。

そう、息を吐いた。

今更ながら、彼女は呼吸をしている。

暗黒の空間、真空状態である筈の場所で。

どういった原理であるのか。

元田舎娘で現倉庫番である彼女に分かるはずがない。

（どうしよう、これから、）

再び息を吐き、彼女は腕のパーツが脱げないか、と思い再び自分の身体を確かめる、その時であった。

『　こ　着』

ノイズまじりのなにかが、耳元から聞こえた。
慌てて周囲を確認する。

視界の端に、黒以外のなにかを見つけ、岩に張り付きながらそれを伺う。

それは見覚えのある戦艦だった。

何隻かの小型艦を従えた、独特の尖った形状をした艦が中央に配置されている。

それは本部に存在している船であることが、イリスにも分かった。

（味方、だ！！）

彼女は身を乗り出しそうになるが、慌てて押しとどめる。冷静になつてから考えみた。

今この状況をどう説明すればいいのか。

味方がどうなったかも、自分の状態すらも分からない。

いきなりこんな姿で顔を覚えられていないような人間が来たらどうなるだろうか？

ましてや、この宇宙に生存しているように見える。

そんな存在は、この宇宙の中でひとつしか存在していない。

『周囲　。　味方は　』

ノイズまじりで通信の断片が聞こえてくる。

どうやら、イリスたちの部隊が消えたことによって派遣された一団らしい。それならまだ話を通じるだろうが、どうしたらいいだろう。

こちらから通信を送ることはできるのだろうか？

彼女が耳元のパーツを鉄の指でたたいてみると、通信に変化が訪れる。

『 敵影接近！！ただちに 』

打って変わって、緊迫した雰囲気通信は、何かの破裂音により途絶えた。

イリスは岩から身を乗り出して状況を確認しようとした。
だが同時に、白いものが目の前を横切った。

戦艦と、周囲に展開していた小型艦の一団がミサイルを発射する。
その白い影に向かっていくそれは、その周囲で全て破裂する。

白い影は真空の闇を縦横無尽に飛び回り、狙いを定められないような動きで戦艦へと接近する。

影の周囲に光が刺す。それに貫かれ、攻撃は全て塵へと消えた。

影が手に持った剣のようなものをかざす。

同時に、戦艦の一団の周囲になにか光るものが展開した。

そして、音もない爆発が起こる。

戦艦に取り付けられた武装の位置全てで。

戦艦はそれで沈黙した。遠目のイリスでも、それは確認することができた。

瞬きほどの間の出来事に、イリスは啞然とする。

その白は、沈黙した戦艦の前に静かに待機している。

その大きさの差は、歴然としていた。

小型艦といっても全長は200メートルほどある。だが、その白は人が少しばかり大きくなっただかのような、そんな大きさであった。

その白は、背中から大きな翼をはやしているかのように見える。

だが、それは背中に取り付けられた鋭利な部品であり、体を覆うなめらかな白い装甲と同じく、機械であるらしい。最低限の装甲をつけられたそれは、速度を重視しているのだろう。地上で見た男の鎧とは違い、身体のラインが見えるような造形をしている。

当然、ところどころに生身の部分が覗いている。

あれがただの人間であるはずもない。

そして、ただの兵器であるはずもない。

それが、イリスの方向を向いた。

心臓が口から出そうになる。

だが、その視線はイリスの方を向いてはいなかった。

振り向いたその顔は、白い装甲によって覆われている。

首から下は見えているが、顔の部分は紋様のある装甲によって覆われており、表情すら伺えない。だが、生身の部分があるからには人であることには間違いないだろう。

イリスは息を飲んで、その視線の先を確認する。
そして、小さく悲鳴をあげた。

そこには、新たな船団が迫ってきていた。

第2章『飛翔〜であい〜(2)』

その白は、新たな標的を確認していた。

目の前の敵はすでに沈黙している。通信を傍受するとなにやら慌てて居るらしいが、彼には関係のないことであつた。

ここで仲間と合流する手はずであつたが、なぜか存在が確認できない。別に彼には問題はなかつたが、ここでの上官が気にするだらう。探すにしても、攻撃をしてくる標的をどうにかしないと煩わしかつたが。

何をするにしても、白の胸中は穏やかであつた。

すでに死んでいる、といつてもよかった。

それをどうにかする気もない。

とりあえずは、言われたことをこなす。

そうしなければ、命すら危うい。

案の定、もうひとつの艦は攻撃を仕掛けてくる。

迫りくるミサイルに対し、手に持った剣を振る。

あたりから光が走り、ミサイルは遙か遠くで爆発をする。

剣撃、ではない。

周囲に張り巡らせた、光鏡による光撃によるものだ。

意識の範囲内であるならば、どんなものもこちらに届くことなく消滅をする。

飛び道具など、無意味である。

それを知らない相手は、いくつかの戦闘機を白に向かって突撃させてくる。機関銃による攻撃に対し、白は特に行動を起こすわけでも

ない。

ただ、煩わしい虫のように吹き飛ばすと、旗艦に向かって足にあるブースターをふかす。

機関銃による攻撃は、全て装甲がはじく。

身体が剥きだしになっている部分も、見えない障壁によって完全に守られている。その障壁によって、体当たりだけで相手を破壊することも可能である。今までこれを破られた攻撃はない。

白の胸中は、死んでいる。

目の前で起こる必死の抵抗も、この後の彼らの未来も、興味がない。ただ、飽き飽きしていた。同じことの、繰り返しに。

ただ一つの人類に、蹂躪されるこの宇宙に。

白はふたたび剣を振るう。

完璧に物事はこなさねば、ならない。

そうしなければ、この命は　　。

『うわあああああああ！！！！！』

絹を裂くような、声が彼のぼんやりとした意識に突き刺さった。

そして次の瞬間、白の身体と意識は大きく揺さぶられることになった。

第2章『飛翔〜であい〜(3)』

彼女は腹から叫びながら、突撃をする。

足に装着されたブースターを噴かせ、あの白い機体へと。手元に構えた機関銃を発射しながら。

先ほどの破壊された戦闘機から浮遊していたものだった。彼女は目の前にあったそれを、つかんだ瞬間、行動に移していた。

白い機体は、すぐにこちらに気づいたようだ。狙い通り、焦ることはなかった。

機関銃の弾丸は、白い機体の目の前で弾けていく。

彼女はそれを気にすることはなく、そのまま機体にぶつかる。

鈍い衝撃が伝わり、彼女の体は一瞬放り出されたような感覚に陥る。

それも一瞬の話、足下と、腰に装着されたブースターが軽く作動し、彼女の体は真空を滑りながら制御される。

顔だけ白い機体を振り返る。

そこには、傷一つついていない姿がある。だが、反撃をする様子はない。

彼女はかまわず機関銃を構えるが、それは手元で破裂する。小さな悲鳴とともにそれを手放すが、装甲のおかげで痛みもない。だが、白い機体がこちらへ来るのが見えた。

（かかった！！）

彼女は悲鳴を飲み込みつつ、体をぶつかった方向に向けたまま、ブースターを噴射した。

船団が遠くに見える。

こちらを補足しているかどうかは知らない。

下手したら、というか確実にこちらも攻撃されるだろう。

敵の存在を知っている自分が何もしなければ同じことの繰り返しになる。

（敵から船団を引き離す、それが一番いいはず！！）

それは一介の兵卒が持つには大きすぎる責任だったかもしれない。だが、やってしまったことは仕方がない。

光が、彼女が飛び回る周囲を貫く。

辺りを浮遊していた岩石が、一瞬にした塵と化していく。

おそらく、あれは”星の人”であることは間違いない。

”星の人”が持つ、最大のアドバンテージは、その体に宿る能力にあった。

あの機体にも、地上でみた男の機体にも、特に目立った武装はついていない。あれだけの重厚な鎧をきておいて、その実弾のひとつも積んではいないのだ。

それはすなわち、補給の必要がないことを意味していた。

剣の一降りで戦艦を武装を破壊し、地上で木々を溶解させたあの

攻撃は、彼らの体に宿る力なのだ。未だにその正体はわからない。だがその授けられた力は、この宇宙を蹂躪し続けてきた。

（この鎧にも、力があるのかも、とは思ったけれど！！）

彼女はめまぐるしく動く視界の端で、重荷と化した機関銃を捨てる。この装備に、武装は一切ついてはいないようであることは分かっていた。

ただの人間である彼女が身に付けている今、それはただの防護服ではない。

足下のブースターの使い方は、感覚でつかんだ。とつさの行動で、勝手についてきたような感じだ。

だが、当然その使い方は背後にいる存在のほうがわかっているだろう。

とつさに行動にでた彼女であったが、その先は何も考えてはいなかった。

ただ、岩にぶつかることもなく飛んでいるのが奇跡だ。後ろの攻撃に当たることもない点でも、

『止まれ』

とても静かな声が聞える。

だが、それは彼女の体を震わせるには充分すぎるものだ。一瞬体が粟立つ。

だが、止まるわけにはいかない。

『止まってくれ』

少年の、声だ。

まだ成熟していない、声変わりをして間もないような。

『聞いてくれ、頼む』

誰が聞くものか。

彼女は悲鳴をあげそうになりながら声もなく叫ぶ。
だったら、攻撃をやめてみる、

『止まってくれ！！！！！！』

その悲鳴のような声に、思わず振り向いた瞬間だった。

彼女の体は大きな衝撃とともにひとつの弾丸と化して、大きな小惑星に向かって飛び込んでいた。

痛みは、ない。

だが、思わぬ状態に一瞬状況を見失う。
砕け散る瓦礫のなか、何かを掴もうとする。

それが何かに掴まれた瞬間、彼女の体は力強く引き寄せられていた。

『う、わっ！』

色気もない声あげた彼女の目の前に、白が飛び込んできた。

気づけば、彼女の体は白い機体の腕のなかにいた。腰の辺りに剣を持っていない左腕が回され、身動きひとつとれないくらいに押さえ込まれている。

無機質な白い面ににらまれるような形となり、彼女の意識は停止する。恐ろしいほどの静寂の中、赤と白の機体は恐ろしいほどの近距離で対向している。

息を飲み込む。

不思議と、恐怖はない。

だが、相手が読めない緊張がある。

顔も、表情も見えない相手は、息をしている。

それは、心なしに震えているように思えた。

『あ、あの、』

『………違う、のか』

震える彼女の耳に入ってきたのは、そんな言葉だった。
それは無機質な外見と、無慈悲な行動とは結びつかない、そんな声だ。

まるで、何もかもに突き放された幼子のような。
そんな恐ろしい孤独に耐えるかのような声だった。

『え、あの、』

状況を忘れ、思わず何か言おうとした彼女の周囲を、小さな振動が揺らした。

白い機体が、彼女をはなす。

しかしその腕はしっかりと捕まれたままだ。

その面が向けている方向に、顔を向ける。
表情が、強ばるのを感じた。

遠く、離れた船団がある。

だが、それを黒い球体が吸い込もうとしていた。
巨大な戦艦の群を、それ以上に大きい。小さな惑星くらいあるかもしれない球体が押しつぶそうとしていた。

それはそのまま、その戦艦群を飲み込み、すべてを消してしまうと収縮を始める。

そして、音もなく消え、小さな爆発が起こるのが見えた。

まるで、最初から何もなかったかのような光景が、後に残される。
だが、イリスの記憶にあったものは、確かに消えた。

今度こそ悲鳴を上げ、白い腕を振り払う。

そして、その場所へと行こうとした彼女の体は、白い機体を残して飛び立つはずであった。

だが、それはかなわない。

イリスの体は、正面から何かにつつかると、近くにある小惑星へと叩きつけられた。

ぶつかったものが、そのまま迫ってきたかのように、彼女の体はその岩肌に礫にされる。呼吸もままならないような、凄まじい重圧が彼女を襲う。

『何・・・、これ・・・、』

白い機体がこちらに向かってくる。
だが、その動きは彼女の遙か手前で止まった。

『状況を報告しろ、アルマ』

耳元から、男の音がすると共に、新たな機影が目の前に降り立った。

第3章『律動くうこぎ』（1）』

その戦艦は、宇宙の闇の中に鎮座していた。

小惑星の中に紛れるように、その黒く光る装甲を潜ませている。大ききさとしては、500メートルほどであり、“彼ら”の持つ戦艦の中ではわりと小さい方であった。

その内部にある、白く、大きな部屋。

そこは研究室と呼ばれていた。

普段は主人の仕事柄のため、全くといっていいほど出番はなかった。だが現在、計器類がところ狭しと並び、その中央には球体の”檻”が鎮座していた。

イリスの意識は、未だにぼんやりとしていた。

周囲では忙しく黒い鎧のようなガードをつけた者が動き回っているのが見えた。

イリスの体は、未だに鎧を纏ったまま球体の中央にいる。手足には電子錠らしいものがかけられ、体を宙にさらされる形で磔にされていた。当然、身動き一つとれない。

それどころか、体に力が入らないような気がする。試しに足下のブースターを再び噴射しようと試みても、足の指先一つ動くことはなかった。

彼女は眉間に皺を寄せたまま目を閉じる。

今、思考は極めて冷静である。

しかし、そこは現在どうしようもない恐怖に晒されていた。息は自

然と荒くなり、動悸は止まらない。涙は奇妙に引つ込んだままだ。だが、何もかもが彼女にとって救いにはならない。

「準備はできたか」

その声に、彼女は目を開けた。

だが、それは彼女に向けられた言葉ではないようだ。

彼女の視線は、球体の前に立っていた一人の男に吸いよせられる。

「ああ目は開いているか」

目の前の若い、そう見える男は彼女を何でもないように見ている。黒いコートのような上着を羽織り、同じ色のズボンと、軍靴らしい傷のついたブーツをはいている。見た目は、まるきり人間のようであつた。黒一色のその格好のなかで、唯一その緑色の目だけが輝いていた。

青年の、ように見える男は、短い前髪をかきあげるように触れると、イリスの瞳をまっすぐに見据えてくる。

「俺はスノウ・ネージューヴァリオンだ。知っているか？」

そういつて腕組みをするその姿は、この宇宙の支配者の一族たる所以の威圧が感じられた。

彼女は、ここに来てしまふことになった出来事を思い出す。

岩に叩きつけられた彼女の目の前。

上から降りてくるように、鉄の固まりが現れる。

右肩にある花が開いたようなパーツが特徴的な、ダークグレーの装甲が視界に現れた。

それは、横にいた白い機体よりも一回り大きく見えるような気がする。

その機体の顔は、顔面を保護するようなバイザーのようなパーツのほかには何もない。

そこには、厳粛な雰囲気を持つ、無表情な男の顔があった。ただ、深い緑の目だけが燃えている。

『ここにある艦隊は必要がなくなった。ガйм、には伝えたはずだが』

男は白い機体を振り返る。

『一体何をしていた』

白い機体は、微動だにしなかった。

男は隠さない大きな舌打ちをすると、彼女に向き直る。

『そして、これは何だ？』

彼女は必死で呼吸をしながら、目の前の男を見る。

その緑色の目はとても険しく、見られているだけで殺されてしまいそうであった。

『まあいい。この宙域の艦隊はすべて破壊した。お前が“処理”したのもな、アルマ』

その言葉に、彼女は涙を飲み込んだ。

飲み込んでばかりだ。何も、かも。

あの日から、ずっと。

『とにかく、だ。ここでの役割は終わった』

『……これはどうなさるのです』

白い機体、アルマと呼ばれた存在が初めて口を開いた。

男の眉間に一瞬皺が寄る。

だが、返事をする際には、きわめて事務的な表情になっていた。

『決まっているだろう。持って帰るんだ』

「まずは、お前の名前を教えろ」

無粋な口調にも、イリスは腹も立たない。

緊張で口が回らない。だが、スノウという男は辛抱強く彼女が名乗るのを待っている。

連れて来られた際、名前は知らなかったが、あの緑色の目だけは知っている。

あのダークグレーの装甲の機体の男、スノウの緑色の目を何とか見据えつつ彼女は口を開く。

「・・・イリス」

「イリス、か。お前の所属は？」

そんなのを答えられるわけがなかった。

イリスは体に冷たい汗をかいたが、スノウの表情は変わらなかった。

「將軍、まずはあの機体の検査を」

「今できるのか」

「はい、生体検査は資料を取ってからになりますが、それは今でも」

答えられないイリスをよそに、何かが始まるようであった。

突如球体の内部だけが暗くなり、何か赤い光が体に照射される。熱くも、痛くもない。だが、体に装着された機械の方がなにやら反応をしているようである。電子音のような淡泊な音が発せられ、内部が忙しく動いているような感触がする。思わず体が強ばったが、それ以上のことはなにも起こらず、再び球体が光を取り戻した。

「これは・・・確かにM A（マージナルアーマー）のようです」

球体の横に鎮座している大きな機械のモニターをのぞきながら、黒いガードを装着した兵は聞き慣れない言葉を口にする。

スノウはそれに対し、あまり反応をする様子はなかった。

「それ以外にないだろう。生産年は分かるか？」

「いえ、データがありません。しかし、「マギア」の発生装置の作りからして、将軍と同じ年代のMAやもしれません」

MAという物が何を指しているかが分かったとき、イリスは記憶からかつて聞いた知識を思い出した。

それは又聞き程度のものであるが、MAとは、彼らが装着している鎧、機械の固まりのようなものを指すようである。

彼らはそれを使い、宇宙を自在に移動することができる。彼らの持つ能力を最大限に活用することができる唯一無二の兵器だ。彼らは、イリスの着ているこれを、そのMAであると認識しているらしい。イリス自身も、それ以外にありえないとは考えている。

スノウの眉間に皺が寄るのが見えた。

「こんな機体がデータにあるのか？色からしてあまり見ないタイプだぞ」

「いえ、こちらでもデータから検証しただけです……。失礼ですが、将軍にも見覚えはないのですか？」

「会った奴なら大体覚えていて。データにないということは、管理外の機体ということか？それこそ大問題だ」

そこでイリスは、彼らが自分を“星の人”だと思っているということに気がついた。

彼らにとっては、そのMAとやらを使用しているのは自分たちと敵対をしている一部の連中ではあり得ない。その連中にしろ、長い

間争い続けている見知った連中である。MAを装着した見知らぬ存在などあり得ないのだ。

そしてその前提がある以上、自分は管理されていない未知の機体を着用しているということになる。

「同年代なら知らない奴はいない筈なんだが……。おい、お前はどこで生まれた？」

生まれた？それは答えることができる。

だが、言っているいいものか分からない。

言いあぐねていると、今度はスノウの表情が険しくなる。

それが一瞬のことであるが、イリスに恐怖を呼び覚まさせるには十分すぎるものであった。

「だめだ、頭が足りないのかもしれない。何にせよ、ここじゃろくな検査はできないだろう」

「本国に生体データを送りますか？」

「いや、それよりも近い場所にヴェンデルの奴がいる。まずは奴に検査をさせる。本国に報告するならそれでいい」

「分かりました」

どうやら、イリスを余所に話はまとまったらしい。

この場での命の危険がないと知ると、自然とため息が漏れた。

その瞬間、スノウの緑の視線がイリスのそれを絡めとった。

「イリス、か」

蘇る恐怖に、息をのんでいるイリスを、じつくりと見てくる。
かと思うと、誰にでも言うでなしに、小さくつぶやいた。

「いい名前だな」

「え？」

部下にも聞こえないようなそんな声を残し、部下に後を任せてスノウは研究室から出ていってしまった。

第3章『律動くうごき』（2）』

研究室を後にし、スノウが向かった先は戦艦のブリッジだ。

丸いドーム状をしているその場所の中央には、操舵席と戦艦の状態を把握するためのコンピューターが設置されている。今戦艦は動いてはいないが、黒いガードを着用した部下たちが整備のために待機している。

スノウが入ると、一様に視線と敬礼が送られるが、彼は片手でそれを制し、作業を続けることを指示する。

「おい、状況を報告しろ」

「は、今のところ目立った異常等はありません」

操縦席の背後にたち、スノウは現状の確認をする。

静かなものであった。

宙域の状況、惑星にいた残党の駆除などが全て終わったという報告を受けると、スノウは懷から小さな通信機を取り出す。

手のひらに収まるサイズのそれを機動すると、小さな画面が空中に開く。

少し操作をすると、目当ての顔が勝手に映し出された。

《あれあれ、あんたから連絡をくれるなんて珍しいな》

カバーよりも少し大きいサイズのパネルには、しばらく顔を見ていない同僚の顔が現れる。

背後には大型の機械や生体サンプルを入れるらしいシリンダーが見えている。どうやら室内での作業中のものであった。

「ヴェンデル、お前にしかできない話があるんだ」

《おいおい性急だな。こっちの様子はどうだとか聞かないのかよ。社交辞令でも聞いた方がいいぜ》

「別にお前の状況は知りたくもない。第一そちらには閣下がおられるからな」

《それで何かあったとしたら俺たち全員の危機だわな》

いつもふざけた調子のこの男だが、今はさらに機嫌がいいらしく、どこか会話も興奮気味だ。金色の瞳もらんらんと輝いているようにも見える。

どうやらスノウたちの指導者の巡回は順調らしい。

《んで、何かあったのかな？何か見つけたとか？》

「ああ、今のところ、とりあえずお前には話をしておきたい」

高揚していた瞳の輝きが、一点に絞られる。それは話に集中している、というよりも話題に食いついたという印である。

《内密にしたいのか？》

「いや、いずれは閣下に報告をする。だが、どう報告していいか分からないんだ」

《今いるところって、ソルなんかの部隊がうろつろしているところだっけ？》

「いや、部隊というほどでもない。ただの人間が惑星探査に来ていくくらいだ。それはもう処分したから問題はなかった」

スノウが行っている今の仕事は、辺境の宙域での掃除のようなものである。本来彼の地位ならわざわざ出向くこともないような仕事であるが、他ならぬ閣下の命令なので、逆らう権利もない。本人も

それで納得をし、臨んでいた。

「ただそこで見たこともないM Aを装着した女を捕獲した」
《M A?》

画面の顔の眉間に皺が寄る。

当然のごとく、晴天の霹靂の様子である。

「名前はイリス。それ以外は答える様子がない」

《聞いたことがない名前だな》

「瞳の色は翡翠。髪は茶色だ。こっちは照合するだけのデータベースがない。そちらで調査をしてくれないだろうか」

《それなら簡単だが、もつと資料を送ってくれないと。体さえ送ってくればどんな病気を持っているかまで分かるぜ》

「それもサンプルを送る。今はその採取の最中だ」

彼は作業をしている部下を横目に、さらに続ける。

「一応本人とも会話をしたんだが、名前以外答えようとしな。頭が足りないのかもしれない」

《そりやお前が女の扱いに慣れてないだけさ。ヒートヘイズさんみたいに女の心をつまぐ把握してだな》

「あの下半身に習うことなんて何一つない。もしかしたら誕生したばかりの存在にしても、M Aを着けているのはおかしいだろう」

《俺たちと同類じゃないとか?よく似た多民族の兵器とか》

「いや、あれは明らかにM Aだ。どうも俺と同年代のものらしい。そもそも俺たち以外にありえないだろう?」

《ま、一応確認をすればいいじゃないか。一発で俺たちかどうか分かる方法があるんだが、とにかくこっちにサンプルを送ってくれや》

「分かった。それまではこちらで保管をしておく」

それから、と口を開こうとして、彼は部下たちが敬礼をする様子を横目に捉えた。通信機から視線を外すと、白い服を着用した存在が、彼の傍に来ていた。

まるで、はじめからそこにいたかのようにいるそれに、彼は小さく舌打ちをする。

「どうした」

一応はそれを隠しながら、彼はそれと対応をする。

その存在は、白いだけのマントを纏い、息をしているのか分らないくらいの静寂をも纏いながらスノウの傍にたっていた。頭にはマントについたフードを被り、その顔には縦と横の直線が交差した模様のついた仮面が存在している。そのせいで、表情すら伺えないのは腹たらしいことであつた。

「お聞きしたいことがあります」

挨拶もなしに、ただ用件を述べる。

まどろっこしいよりマシだ、と自分に言い聞かせつつ、彼はその白と対応をする。

「何だ。お前にやる仕事についてか？」

「いいえ。自分が捕まえた存在のことです」

全く隠しもしない様子で、白は直球で疑問をぶつけてくるらしい。そつえば、というほど忘れたわけではないが、あのイリスという

女に相對していたのはこいつだった。

「それがどうしたんだ」

「あれをこれからどうするつもりなのですか？」

相変わらず、欠伸がでるほど平坦な声だ。

スノウは接觸してきたことに驚きを感じつつ、言葉を選びながら応対をすることにする。

「お前が関与することではない。まずは俺が管理をするが、本国に帰ればしかるべき場所に送る。それだけだ」

「何か、分かったことはあるのですか？」

「お前が知るべきことではない。欲しいんならお前のところの將軍でもおねだりするんだな」

「では、この船でしばらく預かるのですね」

あっけなく皮肉を交わされ、妙な羞恥を味わいつつも、彼は白をねめつける。

「お前にも後で話を聞かせてもらっからな。先にあれと接觸していたのはお前なんだなら」

「承知いたしました」

そう小さく言って、白はそこからブリッジから静かに出ていった。声を荒げることはなかったが、ただひたすらイライラした気持ちが彼の胸の内にたまっていった。

《相変わらずだな》

つながったままの画面の中で、ヴェンデルはさも面白いものを見た、という風に笑っている。

ぶつけそなたったものを代わりにぶつけるように、スノウは苛立ちを隠さずにそれを睨みつける。

「そっちのヒートヘイズに言っておけ。お前から借りた部下はどっちも役に立たないとな」

《それこそ社交辞令でも言わないと、後でややこしくなるかもだぜ》

「事実だ。とにかく、そっちもそれなりの準備をしておけ」

そう言っ通信を切ろうとしたスノウだが、画面のなかの同僚はふと思い出したというふうにそれを遮る。

《ああ、そうそう。俺も言っておくことがあつてだな》

スノウは苛立ちをなんとか抑え、とりあえず、同僚の言葉に耳を傾けることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6873v/>

イリスの瞳

2011年10月6日17時36分発行